ホームカミングデー
学生記者の見て歩記

父と歩いてうれし恥ずかし

文＆写真
学生記者 野口真莉子（法学部２年）

ホームカミングデーを今まで全く知らなかった。10月23日。日曜日の中央大学多摩キャンパスは、普段とは違う雰囲気を醸しだしている。中大生だった先輩方は、パンフレットを片手にお目当ての催事場へ向かっていた。

初めて参加する日。隣には中大卒の父親がいる。一緒に中大キャンパスを歩く日がくるとは…。うれしいやら、恥ずかしいやら、複雑な気持ちだった。父は「この、都会にはない広さがいい」と学生時代を懐かしむように何度も口にした。

２人して、中大学芸連盟茶道会によるお茶を頂いた。茶室が学内にあることも新たな発見だ。「虚白庵」というそうだ。

卒業生である蓮池薫さんの講演を拝聴した。授業で使われる８号館教室はこの日、白髪の方、スーツ姿の方で席が埋まっている。

蓮池さんは、大きな拍手に包まれながら話し始めた。講演が終わって、一つ気付いたことがある。講演時は真剣な面持ち、やや堅い表情という印象だった。終了後、お礼のごあいさつをさせて頂こうと近くまで寄ると、微笑みながら迎えてくださった。私は驚きを隠せなかった。

８号館からセントラルプラザへ。普段はダンスの練習や多摩動物公園駅方面へ急ぐ学生の姿がある。この日は全国各地から集まったという「白門会」の支部旗が数え切れないほど掲げられている。

旧友らと共にテーブルを囲み、食事やお酒を楽しむ人、ステージのショーを楽しむ人。どの顔も笑顔で溢れている。様々な年代層も見てとれた。

卒業後も母校に思いをはせる。こんな光景を見たことはなかった。創設130年余の歴史と数多くの先輩たちによる「つながり」を深く感じとれた。

応援団・チアガール、ウィングオーケストラらによる校歌斉唱が始まると、みなさん、立ち上がった。帽子を振り、手でリズムを取り、大きな声で歌っている。隣で父も歌っていた。

私は恥ずかしながら、校歌を歌えない。でも、「英吉利法律学校」から続く、伝統ある大学に在籍している喜びに浸った。愛校心をこのような形で感じるとは思いもよらなかった。

今は中央大学の学生。卒業後は先輩たちの仲間入りをする一員だということを強く感じた一日だった。

活気づく卒業生